初代ＥＵ大統領にファンロンパイ氏

国際金融情報センターブラッセル事務所駐在員　橋本 択摩

10 月末のＥＵ首脳会議でほぼ決着

欧州連合（ＥＵ）は、11 月 19 日の臨時首脳会議で、初代ＥＵ大統領（首脳会議の常任議長）にファンロンパイ・ベルギー前首相を選出した。同氏は選出一ヶ月前までは候補者として名前が挙げられていなかったが、10 月末に開かれたＥＵ首脳会議後、最筆頭候補として急浮上し、そのままゴールインする格好となった。

人選が本格化する前は、カリスマ性のあるブレア英国前首相を推す声が高く、サルコジ仏大統領やベルルスコーニ伊首相などの支持を受けていた。しかし、英国はユーロ圏外にあること、同氏は中道左派の労働党出身であり（ＥＵ議会の多数派は中道右派の欧州人民党）、またイラク戦争を支持したことがマイナス点となった。さらに、ベネルクス諸国を中心とした小国の間で、「大国出身の大統領は小国の意見を無視するのではないか」という根強い懸念があった。

10 月末のＥＵ首脳会議後、メルケル独首相は「初代大統領は小国から」と発言、サルコジ仏大統領も「最初の候補者が必ずしも最後の候補者であるとは限らない」とし、ファンロンパイ氏に白羽の矢が立つことになった。

高く評価された意見調整能力

控えめで謙虚な性格のファンロンパイ氏は高い意見調整能力を持ち、ベルギーではコンセンサス・ビルダー（合意形成者）として評価が高い。人口一千万人の小国ベルギー内には、北部フラマン語（オランダ語）圏に約６割、南部ワロン語（フランス語）圏に約４割が住んでおり、南北の政治対立は時に国家分裂の危機にまで発展する。ベルギーの主な政党に、キリスト教民主党（中道右派）、社会党（中道左派）、自由党があるが、さらにそれぞれフラマン系、ワロン系に分かれており、政治的統一は極めて困難な状況にある。07 年６月から 08 年３月にかけては内閣不在の時期も経験している。その後首相に就任したルテルム氏（ファンロンパイ前首相の後任として 09 年 11 月に再任）は、北部の自治権拡大を目論んだ結果、南部の反発を招き、最終的に 08 年 12 月に辞任に追い込まれた。しかし、その後首相を受け継いだファンロンパイ前首相は、南部政治家の支持も高く、政権運営の難しい舵取りをうまくこなしてきた。小国出身のＥＵ大統領候補者が多く存在した中で、「小欧州」とも呼ばれるベルギーでの政権運営の経験が、ＥＵ首脳の間で何よりも高く評価された。

欧州の特徴が色濃く出た今回の人事

日本を含め、ファンロンパイ氏の国際的な知名度は、Mr. Nobody と皮肉られるほど極めて低く、例えばブレア氏のような人物が選出されなかったことで「欧州の存在感を高める機会を失った」との意見も聞かれる。しかし、ＥＵ大統領の最重要任務はＥＵ首脳会議の議事進行およびその取りまとめである。統合が進んだとはいえＥＵは一つの国家ではなく、多様な国家の共同体であり、政策調整には困難が付きまとう。これをカリスマ性だけで乗り切ることは欧州では不可能であり、その点コンセンサス・ビルダーとして評価の高いファンロンパイ氏が選出されたことは、極めて欧州的な判断であると言える。

また、外相級ポスト（外交安全保障上級代表）に英国出身のアシュトン女史が選ばれたが、ファンロンパイ氏との組み合わせは、「小国－大国」、「中道右派－中道左派」、「男性－女性」となる。欧州の人事ではバランスが極めて重視され、今回もその特徴が色濃く反映されたと言えよう。